

突撃インタビュー

編集部ハルちゃんが行く！

ハルちゃんって誰？



本誌の編集担当。友人が地元・湘南でイベントスペースを運営することになり、人員不足のため私も駆り出されております。とりあえず「ベトナム料理の会」のイラストレシビを描くことに。絵ゴコロないのに引き受けちゃったため、『ベトナム料理の本』と『スケッチ入門』を前に、うんうん言ってる毎日です。

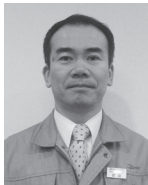
今回は、2008年の「元気なモノ作り中小企業300社」(中小企業庁)にも選ばれた、ピーエムティーさんにインタビュー。会社設立の背景から企業理念、マネジメントに必要な心構えまで、いろいろと教わってまいりました♪

第42回目 株式会社 ピーエムティー



〒811-2115 福岡県粕屋郡須恵町大字佐谷1705-1
TEL(092)933-3110 FAX(092)933-3115
<http://www.pm-t.com>

お話を伺った方



代表取締役社長

京谷 忠幸 氏



システムG

安部 克規 氏

□■今回のお題：企動力®■□

ユーザが喜ぶ製品づくり

ハル：御社は開発・創造型の企業かどうかだったのですが、どのような製品を作られているのですか？

京谷：「軸制御領域」「装置システム領域」「超精密加工領域」を中心に、製品の製作や受託加工・組立を手がけています。オリジナル装置およびユニットの製作としては、超精密X-YステージやNC微細加工機、各種軸制御機器などを製作しています。

安部：受託加工としては測定治具の製作、微細加工や超精密金型、セラミックス加工およびラップ加工など、ユーザの希望をもとに様々な提案をさせていただいております。また、商用エキシマレーザ露光装置や商用電子線描画装置など、「ほしいけれど高額で購入できない」というユーザに向けての製品も手がけています。

ハル：ユーザの声を反映して、喜ばれる製品を提供なさっているんですね。具体的には、どのような特徴があるのですか？

安部：軸制御はナノレベルの超精密加工を手がけており、位置決めは2nmで0.6nmの分解能が可能です。次世代の半導体の検査装置にも使われているんですよ。

京谷：ステージ関連は5年ほど前、エアスライドの真直度測定システムを開発したことをきっかけに、手がけ

るようになりました。電子ビームで超微細な形状欠陥を検査する、半導体検査装置などに生かされています。たとえば言えば、グーグル・アースのナノメートル版ですね。

ハル：おお、それはすごい！

会社設立のあゆみ

ハル：ところで京谷社長は、もともとはセラミックや超硬金型のエンジニアでいらしたそうですね。社長の生い立ちや会社設立にまつわるお話をうかがってもよろしいですか？

京谷：そうですね。私は両親を早くに亡くしましたので、高専を高校課程で終了したのち、ある上場企業で働きはじめました。とはいえまだまだ世間を知らないもので、20歳くらいから日刊工業新聞などを購読し、見聞を広めることにしたのです。上場企業ってたくさんあるな、でも元気な中小企業もたくさんあるんだな、など、世間がいろいろと見えるようになりましたね。

ハル：わ、私がハタチのころなんて、世間はおろか自分の将来のことすら考えず、飲み会に明け暮れてました(恥)。でも私だったら、上場企業に入れたら、それだけで満足し

てしまうけどなあ。

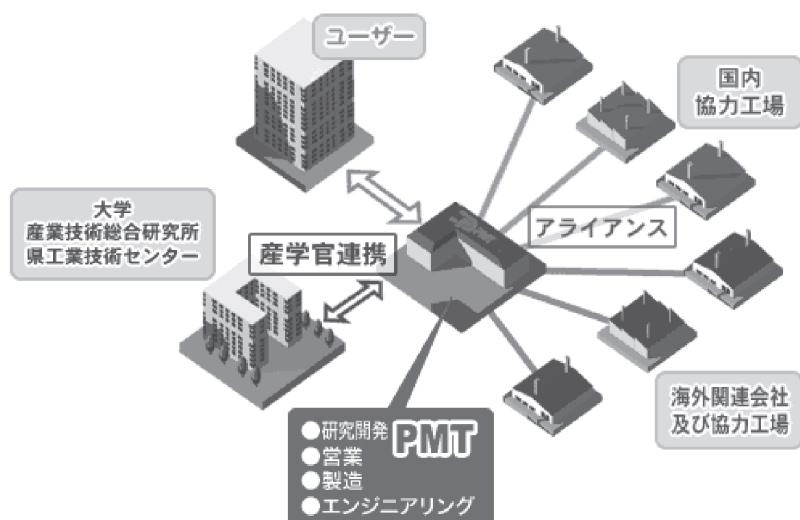
京谷：上場企業の社員といっても学閥がありますし、役員は天下りの場合も多いので、自分はどんなに努力しても頭打ちではないかと思ったのです。そこで1991年、28歳のときに出身地であるこの地に3名で会社を興しました。当初は半導体装置のディーラーとしてスタートしましたが、足りないことだらけでした。ゆくゆくはメカになることを目指していましたが、何もなし。それならば人を集めて実現しようと考えて、人脈などを増やし、メカへと発展させていったのです。

ハル：でも、各企業や団体は自分のこの利益や機密保持の問題とかがあるし、自社以外の人脈を集めて実現するのはかえって大変だったのでは？

京谷：最初はお金もありませんでしたから、企画をメインに発展させていきました。自社の工場がドーンとないのが弱みでしたが、逆に工場がないからこそ、わが社の企画を通じて様々な企業や団体とつながる機会が増えていったのです。

ハル：ないものを嘆くのではなく、弱みを強みに変えていったんですね！

安部：今でもわが社は、ユーザや研究機関、アライアンス・工場などとチーム体制を組んで製品をつくっているんですよ。



ピーエムティーが提唱する、「企動力®」をコアとしたチーム体制。様々なネットワークからもたらされる情報や技術を蓄積し、ユーザの求める製品づくりに生かしています。

キーワードは「企動力®」

ハル: 御社には、京谷社長がつけられたキーワードがありますよね。

京谷: 「企動力®」ですね。その名のとおり「企画し、動く力」です。日々流れる情報やパートナーの声、ユーザからの声を素直に受け止めて、我々に何ができるかを考える。それらの中心となってイメージ・アレンジし、行動していくことを表しています。我々はこの「企動力®」をコアにして、創造業へ変化させているのです。

ハル: そうか、先ほどのお話にもあったように、人や企業とつながることで新たな技術や製品を生み出す原点ともいえる考え方なんですね。でも日々状況が変わるこの世界では、大変なことも多かったのではないですか？

安部: たとえば2001、2002年の半導体バブルの崩壊ですね。当時わが社の売上は7割が半導体関連だったため、かなりの痛手を受けました。中国をはじめとするアジアへの工場移転が加速し、わが社も香港に携帯電話のバックライトを加工する会社を仲間とつくりましたが、その後、同じく携帯電話の加工で中国に進出していた日本の大手メーカーが次々と撤退していくのを目の当たりにしました。

京谷: そんなこともあり、今後を考えました。金型など図面がある分野は、いろいろと振り回される。それなら図面のない仕事をめざそう、という考えに至ったのです。また、町工場ではどうしても、サービス体制などが万全な大手ブランド会社とのつながりが強くなります。それならわが社は、新たな技術を求めている企業や研究機関と連携していくことにしました。ちょうどその頃、学会や大学関係者から小型加工機械を研究されている方々とのつながりができ、産総研からの依頼を受けてマイクロリニア用の機械を製作したのです。

ハル: そういえば本誌(52-7号)の特集内で、安部様に小型加工機についての記事を執筆していただきましたよね！

安部: ちょうどデスクトップサイズの機械が脚光を浴び始めている時期だったので、発展させていくことができたのです。わが社には金型設計や自動機を作る技術があり精度に自信があったのと、セラミックスの磁気ヘッド用治具の技術もありましたからね。これらを小型機に搭載すれば、差別化ができると考えました。静圧の研究もしていたので、その技術も精密ステージに生かされました。

今後の展望やメッセージは？

安部: 社会情勢は厳しいですが、わが社では多くの技術系社員が開発に携わっています。今のうちに、次の技術開発を進めていきたいですね。

また、個々の要素として面白いものを持っている会社も多いのに、それがうまく産業とリンクしていないケースも見受けられます。これらをつなぐ役割も担えればと考えています。

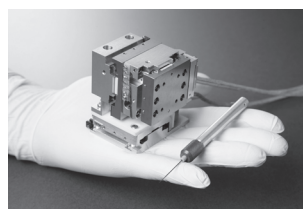
京谷: マネジメント能力を富士山にたとえると、5合目までは「体得」か「理論」、どちらかがあれば登れます。しかし5合目から7合目までは、「体得」「理論」の両方がなければ登れない。そして見通しがきかない7合目から頂上までは、それぞれが磨かれていないと登ることができないと、私は考えています。最近の若い方は競争心がなく、夢や希望を持ちにくい状況にあるように感じます。骨が1本折れてもたいしたリスクにはなりません。骨が折れることを恐れて一歩前に進むことをあきらめると、先に進めないだけでなく大きな後退になります。他力本願でなく、自分の力で進む努力をしていただきたいと思いますね。

取材のあとのお楽しみ♪

福岡にきたからには、博多ラーメンが食べたい！ ということで、ラーメン屋台が軒を連ねる長浜へ。「博多ラーメンと長浜ラーメンは違う」という主張もあるようですが、勉強不足の私には違いがわからず(汗)。お店がいっぱいあって迷いましたが、とりあえず知人に教えてもらった某店(「替え玉」発祥の店ともいわれています)に行くことにしました。地元の老若男女に混じって行列し、食券を買って着席してほっとしていたら、店内のお客さんたちは厨房に向かって「ベタヤワ!」「ナシカタ!」と意味不明な指示を飛ばしておりますよ。な、何語ですか!? オロオロしながら黙ってたけど大丈夫でした☆ あ〜、また食べたくなってきた〜。

こんなモノ ★見つけました★

小型マニピレータ



手のひらにのる小さなボディの3軸(XYZ)ユニット。小さなボディにもかかわらず、光学式リニアエンコーダを内蔵し精密位置決めが可能です☆ 真空中での極小電気部品の導通検査ならびに電気抵抗値計測などの要求から開発されたそう。精密位置決め以外にも、真空、非磁性対応が必要だったエレクトロニクス分野のほか、医療、バイオ分野で細胞ピックアップ技術としての応用が期待されています。